

# 松方コレクションのロダン彫刻に関する調査報告

1937年から1948年までの作品保管リストと国立西洋美術館所蔵の《エヴァ》の鑄造について

大屋美那

はじめに

現在、国立西洋美術館には59点のロダン彫刻が所蔵されているが、これらのうち、《地獄の門》を含む、53点が松方幸次郎収集による「松方コレクション」に由来している。これらの彫刻は、川崎造船所の社長を務めていた松方幸次郎が1916年以降、数回にわたるヨーロッパ滞在中に買い求めたものと考えられている<sup>[1]</sup>。松方コレクションにはロダンのほか、彫刻ではブールデル6点、ダルデ3点、サン・マルソー1点が含まれているが、ロダンの53点というのは、数のうえで他を圧倒している。また、《地獄の門》を筆頭に《カレーの市民》、《考える人》、《青銅時代》、《説教する洗礼者ヨハネ》など、ロダンの代表作といわれるものがおさえられている点も見過ごすことができない。松方がパリ・ロダン美術館とかかわるようになったのは、ロダンの死の直後1917年12月末頃と考えられることから、新規発注のブロンズ彫刻はロダンの死後鑄造ということになるが、1918年以降で松方が渡欧を繰り返した1927年までの間に購入されたと考えれば、ロダン死後であっても比較的早い時期の鑄造であるといえる。なお、現在国立西洋美術館に収蔵されている松方コレクションのロダンのブロンズ彫刻のほとんどは、この時期鑄造を任されていたアレクシス・リュディエの鑄造所によるものである<sup>[2]</sup>。

ロダン彫刻において、これだけ質の高い彫刻が多数収集されたのは、松方が初代ロダン美術館学芸員となったレオンス・ベネディットと太いパイプで結ばれていたことと関係がある<sup>[3]</sup>。リュクサンブール美術館の館長であったベネディットは、ロダンの晩年、彼のために事務的な仕事に従事し、ロダン美術館設立に尽力したうえ、ロダンの遺言執行人の一人に選ばれており、さらにはロダンの死後開館したロダン美術館の初代学芸員に就任し、今日まで続くロダン美術館運営の基礎を築いた人物である<sup>[4]</sup>。そのベネディットが、松方のパリにおける美術品収集のアドバイザーだった<sup>[5]</sup>。ベネディットは1922年に発表された記事のなかで、松方に会ったとき、彼が「ここにはとても素晴らしいロダン彫刻がある。これらのうちのいくつかを持って帰りたい」と申し出て、「30点ばかりのロダン彫刻を選んだ」と回想している。さらに、「彼が日本に帰ることになったとき、彼は私に、彼の代理で絵画を購入し続けること、ロダンについても忘れず購入することを託した。こうして、彼は私に《地獄の門》を発注したのだ。これについては現在も鑄造中である」とも話している<sup>[6]</sup>。このようなやりとりの結果として、松方の彫刻収集においてロダンの作品が優先されたのであろう。

1924年、日本政府による新しい関税法の施行により、美術品を含む贅沢品に10割の税金がかかることになった結果、松方はヨーロッパで収集した膨大な数の美術品を日本に送ることを留保し、ロンドンやパリに保管しなければ

fig.1  
20世紀初めのピロン邸(現在のロダン美術館)  
C1. ルムリー撮影  
パリ・ロダン美術館  
© Musée Rodin, Paris (Ph.9020)



fig.1

ならなくなった。このとき、パリに残された美術品はロダン美術館 (fig.1)の一角に一時的に保管されることになったわけだが<sup>[7]</sup>、この措置も松方とベネディクトの信頼関係の上に成立したものであると考えられる<sup>[8]</sup>。

松方がベネディクトを通じて、何点のロダン彫刻を購入したのかはわかっていない。彫刻に限らず、松方自身は購入した美術品のリストを作成しておらず、また、川崎造船所の経営が危機に陥った後、松方のコレクションは相当数が散逸あるいは焼失したため、その正確な数や作品の流れについては現在も完全に解明されているわけではない<sup>[9]</sup>。神戸市立博物館による売り立て目録を中心とした追跡調査から、現在国立西洋美術館に所蔵されている松方コレクションのロダン彫刻のほかにも、少なくとも5点の彫刻が日本に持ち込まれたことはわかっている<sup>[10]</sup>。また、松方幸次郎の姪ハル・松方・ライシャワーは松方が70点のロダン彫刻を購入したと回想している<sup>[11]</sup>。

現時点では、松方が購入したロダン彫刻の正確なリストについては、購入元であるパリ・ロダン美術館に残された記録の公表を待つほかない<sup>[12]</sup>。そこで今回は、1959年にフランス政府から日本に松方コレクションが返還されるまでのロダン彫刻リストの成立の経緯をたどり、その後、現在松方コレクションとして国立西洋美術館に所蔵されているロダンの彫刻のうち《エヴァ》の鑄造について報告する。

#### 松方コレクションの日本への返還に向けたコレクション・リスト作り

公式に松方コレクションの日本への返還の糸口をつけたのは、1951年9月、サンフランシスコ講和会議に臨んだ吉田茂首相であった。サンフランシスコに渡った吉田が講和会議とは別の個人的な席でフランス主席全権ロベルト・シューマンに、松方コレクションの返還を申し入れたことが、政府間交渉を開始させることにつながったのである<sup>[13]</sup>。しかし、松方コレクションの返還にかかわった松方幸次郎の娘婿、松本重治の話によると、サンフランシスコ講和会議に先立って、日本政府にではなく、松方家という個人にコレクションを返還する動きが始まり、そのためにまずパリで松方コレクションの財産目録を作るよう、松本が当時の在パリ日本政府在外事務所長萩原徹に命じたということである<sup>[14]</sup>。萩原が同事務所長に就任したのは1950年12月1日なので、萩原に

よる松方コレクションの調査が行われたのは、それ以降と考えられる。また、調査には同時期にフランスに渡っていた東京芸術大学の吉川逸治が協力している。この指示に対して、萩原から松本に松方コレクションの詳しい調査結果が報告されたのは1951年9月13日のことである<sup>[15]</sup>。調査の方法については、パリ・ロダン美術館に保管されている松方コレクションの箱を開け、各作品に直接あたって確認してはいない様子で、手紙には、これまでに作成された松方コレクション・リストの「リスト・シエラー」、「リスト・ゲラン」、「リスト・サル」および「1947年の売立のリスト」を比較対照したのち、1920年頃よりパリにあって松方の代理人としてコレクションの管理を任されていた日置釦三郎の記憶により1点1点確認するという方法をとったことが記されている。なお、手紙には作成された時期や作成者の異なるコレクション・リストが全部で8種類あげられているが、そのうち今日判明しているのは4種類で、さらにいえば、この調査の結果として作成されたリストそのものは残っていない。残されたリストおよび手紙での詳しい解説には、松方コレクションに含まれていた彫刻作品についての言及はないことから<sup>[16]</sup>、この調査自体が絵画を中心にしたものであったと考えられる。

一方パリでは、1950年12月26日付で、当時のロダン美術館秘書セル・ゴールドシデル(のちのパリ・ロダン美術館館長)からセーヌ県公有財産管理局長のジルベール・アドレ宛てに、デン・ハーグで開催される展覧会に松方コレクションの《オルフェウス》を出品させることを許可してほしいという内容の手紙が渡っている<sup>[17]</sup>。当時、松方コレクションの作品はパリ・ロダン美術館に置かれているものであっても、敵性資産として公有財産管理局の管理下にあったため、作品の移動には同管理局の許可が必要だったのである。

その手紙に対して、アドレは1951年1月5日付の手紙で、次のように回答している。「残念ながら、松方コレクションに含まれるロダンのブロンズ《オルフェウス》の貸し出しについて、同意できないとお伝えしなければなりません。

実際のところ、松方氏の代理人である日置氏が私に伝えた情報によると、松方コレクションを日本に返還する問題について、ごく近いうちに国際レベルでの決定がなされるということです(後略)」<sup>[18]</sup>。

つまり、吉田茂がサンフランシスコ講和会議に向かう8か月前に、松方コレクションの返還についての政府間交渉が開始される情報がおそらく松方家から日置へ、そしてパリの関係者に伝わっており、それに向けてフランス側の作品の管理体制に変化がみられたことになる。続く1月15日には、ロダン美術館に保管されている松方コレクションの彫刻リストが作成されており<sup>[19]</sup>、松方コレクションの美術品の返還に向け、作品の確定作業に動き出していることがわかる。正式には、フランス政府外務省から松方コレクションに含まれる作品を確定するようパリ・ロダン美術館に要請が示されたのは、1951年8月8日である<sup>[20]</sup>。これに基づいて、1953年8月28日、フランス政府より日本政府に、松方コレクション返還のための公式のリストが提示された<sup>[21]</sup>。

これらの状況を総合すると、松方コレクションの返還に向けてのリスト作りは、サンフランシスコ講和会議よりも前に、日本側、フランス側双方で始まっており、松本が指示をして作らせた松方コレクションの作品リストそのものが確認できていない現時点では、彫刻においては1951年1月15日付のリストが返

還に向けた最初のものであるということができる。

### 1951年以前の松方コレクションのロダン彫刻リスト

それでは、返還交渉が始まる以前の段階では、松方コレクションはどのようなリストに基づいて管理されていたのであろうか。ロダン彫刻に関して、その状況を追ってみる。

パリ・ロダン美術館に残っている、松方コレクションの彫刻リストのうち、もっとも早い時期のリストは1937年2月18日作成のもので、火災保険に加入するときの保険証書<sup>[22]</sup>に添付されている。次は同じ火災保険証書に添付されたもので、1941年3月6日付である<sup>[23]</sup>。その後1945年には、セーヌ県公有財産管理局が松方コレクションの内容を検査し、作成した8月10日付のリストが2種類ある<sup>[24]</sup>。さらに3年後の1948年には、3月16日付でセーヌ県公有財産管理局による2種類のリストがある<sup>[25]</sup>。なお、セーヌ県公有財産管理局がリストを作成しているということは、連合軍によるパリ解放後のド・ゴール政権下で松方コレクションがフランスに残された敵性資産として没収され(1944年)、作品の管理が松方の代理人である日置の手から離れたことを意味している。

以下、順を追ってこれらのリストの内容を示し、それぞれのリストに記載された作品名の比較から、いくつかの相違点を指摘していく。

#### (1) 1937年2月18日付火災保険証書添付リスト

この保険は「神戸に住む松方」のコレクションの絵画、彫刻を対象として、1937年2月24日から翌年2月24日までを有効期限としてかけられている。証書には絵画と彫刻のリストが添付されており、そのリストの内容に関する問い合わせはパリのルネ・ルフェヴルが応じるとされている。

ロダン彫刻については54作品が、通し番号、評価額とともに記載されている。これらの作品につけられた番号には、構成の似た作品の間で多少の混同があるものの、大部分は1953年に日本に示された松方コレクション・公式リストに一致する<sup>[26]</sup>。ただし、作品の存在自体が一致しないものがある。1953年の公式リストにあって1937年のリストにない作品としては、《小さなトルソ》があり、逆に1937年のリストにあって1953年の公式リストにはない作品としては、《嘆き(大理石)》《大きな影》《ダルーの胸像》《ロダンのトルソ》がある。これらの作品については、1953年の公式リストにフランス側から示された「松方コレクションの彫刻に関する註」に一部説明されている。

- 「1. L'Ombre (Bronze) リスト2の41番は戦前松方氏がアメリカに送った。
1. Le buste de Dalou (Bronze) リスト2の22番はブアルソヴィーに松方が貸したまま帰ってこなかったらしい。(中略)
1. 代りに松方氏のリスト2にのっていないRodinの“Petit torse d'homme” (bronze) が入っている」<sup>[27]</sup>。

《大きな影》《ダルーの胸像》についてはのちに触れるが、この註に記された事実関係やそれぞれの作品の移動が意味することについては、現段階では不明であり、今後の調査課題としたい。

#### (2) 1941年3月6日付火災保険証書添付リスト

これも、1937年のものと同様、1年間有効の火災保険証書である。ここには絵

画、彫刻の所有者である「神戸に住む松方」の名前に加え、代理人として「ブルターニュの日置」の名が明記されている。さらに、作品リストは「リスト1」「リスト2」「リスト3」に分かれており、「リスト1」はパリ・ロダン美術館に保管されている55点のロダン彫刻、「リスト2」はアボンダンに保管されている絵画、「リスト3」はリュディエの鋳造所に保管されている彫刻という内容である。このリストによって、日置が松方コレクションの絵画をアボンダンに疎開させていたとき、彫刻については、パリ・ロダン美術館とリュディエの鋳造所に保管されていたことがわかる。

「リスト1」には1937年のリスト記載の54点に《絶望(ブロンズ)》《ブルターニュ人の3つの頭部》<sup>[28]</sup>、《考える人(拡大作)》は「リスト3」に移されている。

「リスト3」にはリュディエの鋳造所に保管されているとして《考える人(拡大作)》が1点記載されているだけであるが、注意深く見ると、実際にはほかにもあったことが「リスト1」に添えられた手書きの印でわかる。つまり、「リスト1」の各作品名の脇には、このリストをもとに所在を再確認したときにつけた手書きの記号が残っているのである。《フギット・アモール》、《接吻》、《考える人》、《クローデル》<sup>[29]</sup>、《春》<sup>[30]</sup>、《地獄の門のマケット》、《嘆き》、《ブルターニュ人の3つの頭部》、《地獄の門》の作品名の脇には、「R」の文字が書かれており、これはリュディエの鋳造所での保管を意味するものと推測される。

また、リスト上には以下の作品に別の書き込みが見られる。

「14)ジャン=ポール・ローランスの胸像 NY 14-4-39

22) ダルーの胸像 NY

33) エヴァ × B

41) 影 San francisco 7-12-38

45) 髪に花を飾る少女 NY 14-4-39」

これらの記号の意味は、次の1945年のリストを見ていくとわかってくる。

### (3) 1945年8月10日付リスト

奇妙なことに、この年、セーヌ県公有財産管理局によって作成された8月10日14時付の目録調書は2種類残っている。これについて筆者は、まず公有財産管理局検査官アドレからパリ・ロダン美術館秘書のゴールドシデル宛ての8月24日付手紙に添付された8月10日付の目録調書が作られ<sup>[31]</sup>、次に改訂版としてもうひとつの目録調書が作成されたと推測する。その根拠として、ゴールドシデルの手紙を以下にあげる。この手紙はアドレによる8月24日付の手紙への回答であり、8月10日付目録調書として各作品の題名と評価額を提示したアドレに対して、次のように書いている。

「(リスト上の)いくつかの作品については、示された金額を受け入れることができません。このような過度の評価については判断を保留すべきです。(中略)さらに、当美術館に保管されている作品についてリストを確認したところ、いくつかの作品については、戦争以前に展覧会に出品する目的で、アメリカに送られていることが判明しました。それらの作品については、帰国し次第コレクションに戻されることになっています。以下該当作品。

《髪に花を飾る少女》

《ジャン=ポール・ローランスの胸像》

《大きな影》

《エヴァ(大型)》<sup>[32]</sup>

つまり、筆者はこの意見を受けて、8月10日付のリストが作成し直されたと考ええる。そのことを示すように、2番目のリスト<sup>[33]</sup>では、すべての作品について評価額が下げられており、さらには、調書の最後に、ゴールドシデルが指摘した4点の作品について、これらが「戦前に展示目的でアメリカに渡った」ことが付記されている。

さて、ここまでくると、前にあげた1941年のリストの手書きのメモは、《エヴァ》を除いては、作品の貸出日と貸出先ということがわかってくる。すなわち、それぞれ

「14) ジャン=ポール・ローランスの胸像 1939年4月14日、ニューヨークに送られる

22) ダルレーの胸像 ニューヨークへ送られる

33) エヴァ × B

41) 影 1938年12月7日、サンフランシスコに送られる

45) 髪に花を飾る少女 1939年4月14日、ニューヨークに送られる」

と解読することができる。すると、アメリカに送られたのは、ゴールドシデルが書いているように《髪に花を飾る少女》《ジャン=ポール・ローランスの胸像》《大きな影》《エヴァ(大型)》ではなく、前者3点と《ダルレーの胸像》ということになる。

これに関しては、そのことを裏付ける1枚の手書きのメモが別に残っている(以下「松方-館外保管メモ」と呼ぶ)。

「松方コレクション

欠けている作品;

-《髪に花を飾る少女》(1939年8月14日にニューヨークに送られる)-Mコレクションに戻すために、返却待ち。

-《影》(1938年12月7日にサンフランシスコに送られる)-Mコレクションに戻すために、返却待ち。

-《エヴァ》(1941年10月16日、売却のため、リュディエの鑄造所に送られる)

-Mコレクションに戻すために、リュディエの鑄造所で新たに鑄造される。

(1945年5月)

-《ジャン=ポール・ローランスの胸像》(1939年8月14日にニューヨークに送られる)-Mコレクションに戻すために、返却待ち。

-《地獄の門》、リュディエの鑄造所。

-《ダルレーの胸像》(1939年8月14日にニューヨークに送られる前に、(筆者註:以下、解読不可))

-《嘆き》<sup>[34]</sup>

これらの作品が、松方コレクションに戻されたのかという点については、次の1948年のリストがその結果を伝えている。

(4) 1948年3月16日付リスト

1948年、4月10日から6月30日までの予定で、バーゼル美術館でロダン展が開催されることになり、バーゼル美術館側から松方コレクションに含まれるロダン彫刻の出品依頼がパリ・ロダン美術館に対して行われた<sup>[35]</sup>。早速、パリ・

ロダン美術館の秘書を務めるゴールドシデルは公有財産管理局の許可を受けるべく手続きを始めた結果、1948年3月16日15時30分付で、公有財産管理局のアドレから貸し出しを許可する正式文書を受けた<sup>[36]</sup>。この許可文書には28点の出品作品リストがつけられており、そのなかに、「松方-館外保管メモ」にあげられた《エヴァ》、《髪に花を飾る少女》、《ジャン=ポール・ローランスの胸像》が含まれている。しかも、これら3点だけはリスト中で作品名、評価額とも手書きで書かれており、後からつけ加えられた可能性がある。

さらにいえば、これらの作品が松方コレクションに戻っていることについて、つじつまを合わせるかのように、同年同月日、パーゼル美術館への許可文書の発行のわずか30分前の15時付で公有財産管理局により目録調書の補遺が作成されており<sup>[37]</sup>、「8月10日の目録調書ではアメリカに渡っているとされた」上記3点がパリ・ロダン美術館に戻っていることおよび《大きな影》がアメリカから戻っていないことが「パリ・ロダン美術館秘書のゴールドシデルによって報告された」と明記されている。

以上のように、松方コレクションに含まれるロダン彫刻については、1937年から1948年までの間にほぼリストが確定され、水面下で返還交渉が始まった後の1951年1月のリストを経て、1953年8月に日本政府に示された公式リストに至ったと考えることができる。その間、パリ・ロダン美術館の判断で、いくつかの作品について外国で開催された展覧会や鋳造所などに向けて移動が行われ、1944年以降は公有財産管理局がパリ・ロダン美術館の措置について確認をとる、あるいは許可を与えるという作業が繰り返されたことになる。パリ・ロダン美術館のこうした判断については、1944年に松方コレクションがフランス政府に没収される前であれば、松方の代理人である日置やさらには松方自身に報告がなされるべきであるが、日置が1930年代から40年代にかけてロダン美術館学芸員のクラブとの間に交わした手紙のなかには、これまで記述したようなロダン彫刻の移動についての報告は見られない。

#### 国立西洋美術館所蔵《エヴァ》の鋳造について

最後に、「松方-館外保管メモ」にアメリカに送られた4点の作品や《地獄の門》などととも記載されていた《エヴァ》について報告する。1941年のリストでは「× B」という記号が付されていた《エヴァ》は、「松方-館外保管メモ」には「1941年10月16日、売却のため、リュティエの鋳造所に送られる」「Mコレクションに戻すために、リュティエの鋳造所で新たに鋳造される。(1945年5月)」と記されていることはすでに指摘した。その後、1948年のリストに復活していることから、それまでになんらかの形で《エヴァ》はパリ・ロダン美術館に戻されたことになる。つまり、「B」の意味は明かではないが、「×」については、1941年時点で同美術館にはなかったことを示している。

ところで、1945年の松方コレクションの《エヴァ》の鋳造について記述する前に、《エヴァ》には大きく分けて2種類のものがあることを説明しておく必要がある。いわゆる「岩のないエヴァ」と「岩の上のエヴァ」である。

《エヴァ》(fig.2)は《地獄の門》の脇に《アダム》と対で置くものとして、1881年頃に制作が始められた<sup>[38]</sup>。1883年に1/2等身大の作品がロンドンで公開



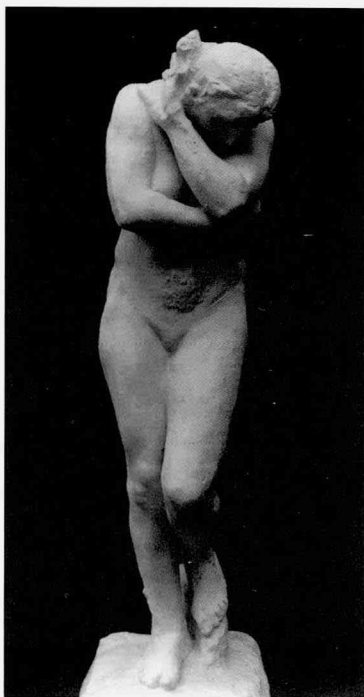


fig.2  
 オーギュスト・ロダン〈エヴァ〉石膏、  
 1881年  
 ジャック=エルネスト・ビュローズ撮影  
 バリ・ロダン美術館  
 © Musée Rodin, Paris (Ph.2869)

fig.3  
 オーギュスト・ロダン〈エヴァ〉ブロンズ、  
 1880-81/89年  
 バリ・ロダン美術館  
 © Musée Rodin, Paris (S.484)  
 Photo © Bruno Jarret/ADAGP,  
 Paris & SPDA, Tokyo, 2000



fig.2

fig.3



fig.4  
 オーギュスト・ロダン〈エヴァ〉ブロンズ  
 国立西洋美術館

fig.5  
 オーギュスト・ロダン〈エヴァ〉ブロンズ  
 国立西洋美術館



fig.4

fig.5

された後、1887年に等身大の像がフランソワ・リュディエによってブロンズに  
 造された。ただ、等身大のブロンズ像の公開は、1899年の「サロン・ド・ラ・ソ  
 シエテ・ナシオナル・デ・ボザール(国民美術協会のサロン展)」までなされて  
 いない。《エヴァ》のモデルになったのは、ロダンお気に入りのモデルの一人、  
 アブルツェツツィとされている<sup>[39]</sup>。ロダンがデュジャルダン=ポーメツツに語った  
 ところによると、

「褐色の髪モデルは、太陽の国の女たちのブロンズ色に輝く焼けた、熱  
 い肌をしていた。彼女の動きはすばやく、狡猾で、豹のようにしなやかで優雅  
 だ。力強く、堂々とした筋肉の美しさ、完璧に均整のとれた単純な挙動がす  
 ばらしいポーズを生むのだ。そのとき、私は《エヴァ》を制作していた。

私は理由はわからなかったが、モデルの変化に気がついた。私は大きくなり  
 続ける形の連続的な変化にしたがって、そのまま輪郭線をつくりかえた。あると



き、私は彼女が妊娠していることを知り、すべてを理解した。腹部の輪郭はほとんど変わらないが、腰と脇腹の筋肉を見ながら私がいかに忠実に形をなぞっていったかがわかるだろう」。

「エヴァを解釈するために、妊娠している女性をモデルにする必要があるなどとは考えてもいなかった。私にとってはうれしい偶然であったが、妊娠した女性が私に与えられ、このことがこの像の性格付けにおおいに役立った。しかし、まもなく、ささいな問題が生じた。私のモデルはアトリエが寒いので、あまり来なくなってしまったのだ。そしてついにはまったく来なくなった。それが、私の《エヴァ》が未完成になった理由だ」<sup>[40]</sup>。

ロダンが言うとおり、等身大の《エヴァ》のブロンズ像 (fig.3) は頭部や脚の部分に粗さが残り、制作途中の可能性もかがわせる。また、彼女は台座の上の小さな突起に左足を乗せていることも指摘しておく。

ところが、現在国立西洋美術館に収蔵されている《エヴァ》 (fig.4、5) は頭部や脚を含めた身体全体がなめらかに仕上げられ、上記の《エヴァ》と明らかに異なった特徴を見せる。さらに、ブロンズ像でありながら鑿跡が残った台座は、塊状になって像の背後に向かって盛り上がり、高さは足の付け根のあたりに達している。左足はこの塊に乗った状態である。

前者が「岩のないエヴァ」であり、一方、国立西洋美術館の《エヴァ》は「岩の上のエヴァ」ということになる。この「岩の上のエヴァ」は、大理石あるいは石灰岩による《エヴァ》 (fig.6) の特徴をそなえていることから、タンコックが指摘しているように石像をもとに鑄造された可能性が高い<sup>[41]</sup>。まず、岩の上に像を乗せているのは、石の荷重を支える工夫であって<sup>[42]</sup>、現在確認されているすべての等身大の石の《エヴァ》に共通している<sup>[43]</sup>。また、これらの石像の表面は、「岩のないエヴァ」と違ってなめらかに仕上げられており、顔や髪型の特徴がはっきりとしている。なお、タンコックによると、石から鑄造された等身大の《エヴァ》は国立西洋美術館に所蔵されているものしか確認されていない<sup>[44]</sup>。

そこで、この「岩の上の」《エヴァ》がいつ鑄造されたものかということになる。パリ・ロダン美術館の資料室で、松方コレクションの《エヴァ》という項目を引くと、1928年鑄造の「岩のないエヴァ」が出てくる<sup>[45]</sup>。もちろん、これは現在国立西洋美術館に所蔵されている《エヴァ》とは異なる。一方、同資料室には1945年5月12日、リュディエによって「岩の上のエヴァ」(等身大)が日本向けに鑄造されたという別の記録がある<sup>[46]</sup>。この日付は「松方-館外保管メモ」の《エヴァ》の項、「Mコレクションに戻すために、リュディエの鑄造所で新たに鑄造される。(1945年5月)」と一致する。このことから、1937年のリスト以降一度姿を消した松方コレクションの《エヴァ》については、大理石あるいは石灰岩をもとにしたいずれかの原型が1941年にリュディエの鑄造所に送られたのち、1945年5月までに鑄造され<sup>[47]</sup>、このとき鑄造された《エヴァ》が1948年のリストに再登場した可能性が高い。なお、1949年、エリオが刊行した『ロダン』には、《岩の上のエヴァ》として等身大のブロンズ像の写真が掲載されている<sup>[48]</sup>。刊行年から考えて、これが松方コレクションに戻すために1945年に鑄造された《エヴァ》とも考えられる。筆者は、現在国立西洋美術館に収められている「岩の上の」《エヴァ》は、上記経緯をたどった末に1953年の公式リストに記載

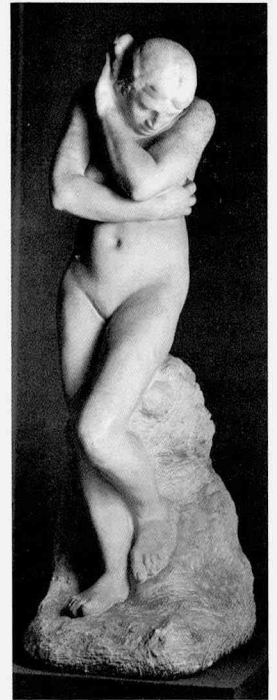


fig.6  
オーギュスト・ロダン《エヴァ》石灰岩、  
1901-06年  
彫り師：エミール＝アントワース・ブール  
デル  
ニュー・カールスベア彫刻館、コペンハー  
ゲン  
© Ny Carlsberg Glyptotek,  
Copenhagen

され、返還に至ったと推測する。さらに、1941年より前の《エヴァ》を、パリ・ロダン美術館の記録にあるとおり1928年に鑄造された「岩のないエヴァ」と考えれば、1945年の鑄造で松方コレクションのための《エヴァ》にはもとのものと異なる原型が使用されたことになる。

## むすび

今回は、松方コレクションのロダン彫刻に関して、残されたリストを比較することと、パリ・ロダン美術館での保管期間内の作品の移動を示し、現在国立西洋美術館に収蔵されている《エヴァ》の鑄造の問題を指摘した。しかし《エヴァ》については、1945年以前に松方コレクションの《エヴァ》とされた作品が1928年鑄造のほかにとどれだけあるのか、またそれはどんなもので現在の所在はどこか、1945年鑄造の《エヴァ》の鑄造プロセスはどのようであったのかなど、解明すべきいくつかの問題が残されている。これらを今後の課題としながら、松方コレクションのほかの彫刻作品についても、個別的な調査を続ける必要があるだろう。

フランスに残された松方コレクションの彫刻についての調査は、コレクションの始まりから80年以上経って、フランス側、日本側双方によってようやくまとめられ始めている。松方が購入した彫刻が国立西洋美術館の所蔵に至るまでには、第二次世界大戦中の混乱期を含め、調査を困難にさせる要因が多く、現在パリ・ロダン美術館に記録されている内容も、今回のように日本側の資料とつきあわせてみると一致しないところがあることがわかった。とくに、絵画と違って彫刻には鑄造の問題があり、何をもって松方自身が購入した彫刻であるとするのかなど議論する余地は多い。しかし、松方が購入した後の別鑄造という問題に関していえば、これまで松方コレクションの《カレーの市民》について1952年以降の返還交渉のなかでフランス側がその引き渡しを拒んだために、日本側が費用を負担して新鑄造されたこと<sup>[49]</sup>はわかっていたものの、それ以外の別鑄造の存在は知られていなかった。そうした状況のなかで、今回《エヴァ》について別鑄造の可能性が生じたことの意味は大きいと考える。

[付記] 今回の調査にあたっては、パリ・ロダン美術館学芸員クローディ・ジュドラン氏とそのアシスタントのクリスティナ・ビュレイ氏に便宜を図っていただいた。また、同美術館資料室のアラン・ボジール氏ならびにデルクロー氏には、資料の検索にあたり的確な助言をいただいた。また、国立西洋美術館の高橋明也氏、喜多崎親氏、田中正之氏をはじめ学芸課の皆様には松方コレクション、ロダン彫刻に関する所蔵資料をこころよく提供していただいた。ここに記して感謝申し上げる。

なお、調査の方法や文献情報などについて、カリフォルニア大学のジャック・デ・カーズ氏にご指導いただき、スタンフォード大学の故アルバート・エルセン教授には生前ロダン彫刻研究について重ねて励ましの言葉をいただいた。ここに心からの感謝の意を表する次第である。

[1]インタビューのなかで松本重治は、松方幸次郎がロダンと直接会い、「ロダンが鋳型をつくるのに全部金を出す約束を」し、その経済的援助のみかえりとして、遺言により「作るものは全部一つずつ松方コレクションに取って置いてくれ」と言ったため、国立西洋美術館にあるほとんどのロダン彫刻はロダン自身の寄贈によるものであると話している。しかし、註2にあるように、松方がパリ・ロダン美術館と接触をもったのは、ロダンの死後、1917年12月末以降のことと考えられ、上記のような関係があった可能性は低い。また、パリ・ロダン美術館では、いくつかのロダン彫刻について松方が買ったときの金額を記録していることから、ほとんどが寄贈によるものであるということは考えにくい。

なお、ハル・松方・ライシャワーも松本と同じ内容を記述している。

〔松方コレクション関係者の話〕松本重治氏にきく、垂木祐三編『国立西洋美術館設置の状況第一巻 ―関係者にきく―』国立西洋美術館協会、1987年、p.16。

ハル・松方・ライシャワー『絹と武士』文藝春秋、1987年、p.344。

[2] 国立西洋美術館所蔵松方コレクションのロダン彫刻のうち、アレクシス・リュディエの鋳造所の銘が入っていないブロンズ彫刻は以下の通り。ただし、《地獄の門》は記録からリュディエの鋳造所で鋳造されたことが確認されている。

《花子のマスク》《嘆きの獅子》《三人のファウナたち》《地獄の門》

なお、この時代、アレクシス・リュディエはすでに故人となっており(1897年死去)、後を継いだウジェーヌがアレクシス・リュディエの名で鋳造を行っていた。ウジェーヌがロダン美術館の鋳造を行っていた期間は1902年から52年までである。

[3] 松方とベネディットとの出会いについては、タバランが1922年、ロダン美術館の訪問記事のなかで、ベネディットへのインタビューとして記録している。それによると、松方をベネディットに紹介したのは、「リュクサンブール美術館への主要な寄贈者」であるエドモン・ダヴィスと、フランク・ブラングインであるとされている。このことは、ロダン美術館に保管されている手紙の中にエドモン・ダヴィスからベネディット宛て、松方幸次郎という日本人の美術品収集家を紹介すること、彼がロダンの作品を求めていることを伝える内容の手紙が残されていることと一致する。また、イギリス側での松方の美術品収集の相談役となった画家フランク・ブラングインが仲介したとされる方は、藤本光城が「松方幸次郎物語」で記しているほか、ハル・松方・ライシャワーによっても記述されている。

両者のやりとりが始まった時期については、タバランのインタビューでベネディットは「5～6年前」つまり1916年～17年という曖昧な答え方をしているが、ダヴィスからベネディット宛てた手紙の日付から1917年12月末頃と考えられる。ブラングインによる紹介がいつなのかはわかっていない。

TABARANT, “La collection Matsukata”, *le Bulletin de la vie artistique*, 1922, p.565.  
Lettre de Edmund Davis à Léonce Bénédite, le 30 décembre, 1917, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

藤本光城「コレクション王 松方幸次郎物語(50)」『都新聞』1957年4月23日。

ハル・松方・ライシャワー、前掲、p.344。

[4] 晩年のロダンに対するベネディットの働きについて、バトラーはベネディットとロダンの関係は1890年代から続いていたが、1912年頃から急速にベネディット側からの働きかけが強まり、事務処理を執り行うようになったと書いている。その関係は人間的な信頼関係や友情にもとづくものというよりは、ビジネス上のものであったらしい。とくに、ロダン美術館設立に向けてフランス政府との交渉が進んでいた1914年頃から、ベネディットはロダンの代理人として、彼の作品に関する諸権利を管理する役目を果たした。ロダンもこのことを認めている。

BUTLER, Ruth, *Rodin, the Shape of Genius*, Yale University Press, New Haven and London, 1993, pp.509-13.

[5] ベネディットが松方の美術品収集に助言を与えていたことは、渡欧中の松方についてまわり美術品収集の現場に立ち会った矢代幸雄によって報告されている。このなかで矢代は、フランス美術の最新動向に乗りきれないベネディット(矢代はヴェネディットと記述)の美術品選択眼に否定的な見解を示している。

同じ記事のなかで、矢代は松方コレクションに多数のロダン彫刻が入ることになった理由として、ベネディットの助言があった可能性を示唆している。

また、藤本光城は1918年、パリで松方とベネディットが会った際に、ベネディットが松方にロダン彫刻の購入を勧めたのに対して、松方は「彫刻まではとても手が出ぬ」と、その場では購入を断ったこと、後には60点のロダン彫刻をまとめて買ったことを書いている。ただし、藤本の記述は物語として構成されているため、すべての事実関係が正確であるとはいえないことをこわってお。

矢代幸雄「松方幸次郎」『藝術新潮』1955年1月、pp.157-8、164-5。

藤本光城、前掲。

[6] TABARANT, *op.cit.*, pp.565-6.

これらのベネディットと松方のやりとりがいつ行われたのかについては、ベネディットは語っていないが、記事の発表が1922年であることから、1917年末から18年まで、あるいは1921年から22年までの松方の渡欧中ということになる。

[7] 結局、松方が収集した絵画作品は、1959年に日本への返還が実現するまで、パリではロダン美術館に保管されることとなった。ただし、第二次世界大戦が激化し、パリにナチス・ドイツ軍が侵攻する直前、日置紅三郎と当時のパリ・ロダン美術館学芸員ジョルジュ・グラップの決定により、一時的に日置の疎開先アボンダンに絵画作品が移されたほか、ブローニュにあった日置の自宅に何点かの絵画が持ち込まれていた。

[8] 1925年にベネディットが死去し、ロダン美術館の学芸員にはジョルジュ・グラップが就任するが、松方コレクションの管理についてはグラップに引き継がれたのではなく、ベネディットの娘のローザに引き継がれたようである。ロダン美術館には、松方コレクションに関連して、ローザとグラップの間で交わされた手紙が残っている。なお、彼女は1928年に結婚してアメリカに渡ったため、その後はグラップが直接、松方の代理人である日置とやりとりをしている。

Lettre de Rosa Bénédite à Georges Grappe, le 3 juillet, 1926, Dossier Matsukata,

l'Archives du musée Rodin, Paris.

Lettre du musée Rodin à Rosa Bénédite, le 22 novembre, 1927, Dossier Matsukata,

l'Archives du musée Rodin, Paris.

[9] 神戸市立博物館において1989年に開催された「松方コレクション展」に続き、翌年、同博物館編集により『松方コレクション 西洋美術総目録』が刊行され、松方コレクションに含まれていた美術品の全体像を明らかにする試みがなされた。膨大な数の資料から1点ずつ作品を見つけたす丹な

編集作業の結果、これまで知られなかった「旧松方コレクション」の作品が掘り起こされ、8000点にのぼるといわれるヴェヴェール旧蔵の浮世絵コレクションを別にして1903点の美術品がリスト化されたが、いまだ全体数や作品の流れには解明されていない部分が多く、完全なリストには至っていない。

なお、橋本朔郎は松方コレクションの推定総数を10111点としている。

また、湊典子は、解明された松方コレクションの一部として、ロンドンの倉庫パンテクニカンの火災で焼失した作品を300点、ロンドンからの荷送表に記載された作品数を1181点、山中商会ロンドン支店岡田友次の覚え書きに書かれた作品を1347点、パリに保管されていた作品を388点と指摘している。

神戸市立博物館編集『松方コレクション西洋美術総目録』『松方コレクション展』実行委員会、神戸市立博物館、1990年。

橋本朔郎「松方コレクション由来記 第四話」『かわさき』川崎重工業、1969年9月(第5号)、pp.13-4。

湊典子「松方コレクションのイギリス絵画」『神戸市制100周年記念展 松方コレクション展』神戸市立博物館、1989年、pp.124-5。

松方コレクションの購入後の作品の流れについては、以下の文献に概略が示されている。

神戸新聞社編集『火輪の海 — 松方幸次郎とその時代(下)』神戸新聞総合出版センター、1990年、pp.300-2。

[10]『松方コレクション西洋美術総目録』前掲、pp.457-72。

[11] ハル・松方・ライシャワー、前掲、p.347。

さらに、橋本朔郎は松方が1921年に渡欧するとき、すでに《地獄の門》ほか50～60点のロダン彫刻を「ルクサンブールのベネディクト館長に預けている」と黒田清輝に語ったと書いているが、それについての根拠は確認できていない。

橋本朔郎「松方コレクション由来記 第八話」『かわさき』川崎重工業、1970年(第9号)、p.44。

[12] 2001年4月から、静岡県立美術館、愛知県美術館で『ロダンと日本』展の開催が予定されており、その図録で、ロダン美術館に保管されていた松方コレクションのロダン彫刻について、パリ・ロダン美術館側が論文を執筆することになっており、松方が購入したロダン彫刻の全体像について資料が公開されることを期待している。

[13] 松方コレクションがフランス政府から日本政府に返還されるまでの経緯については、以下の文献に詳しい。

〔特集記事〕開館までの八年『藝術新潮』1959年4月、pp.132-7。

〔松方コレクション関係者の話〕松本重治氏にきく『国立西洋美術館設置の状況 第一巻 — 関係者にきく —』前掲、pp.14-20。

『火輪の海 — 松方幸次郎とその時代(下)』前掲、pp.292-4。

[14] 当初、フランス側から松方家にコレクション返還の話が持ち込まれたことについては、下記の文献に書かれている。

なお、橋本朔郎によると、松方家に対してフランス政府がコレクションの返還の打診をしてきたのは昭和25年(1950年)初めとされている。

〔松方コレクション関係者の話〕松本重治氏にきく『国立西洋美術館設置の状況 第一巻 — 関係者にきく —』前掲、p.15。

矢代幸雄、前掲、p.168。

松方三郎『民芸・絵・読書』築地書館、1976年、pp.131-3、初出「松方幸次郎とコレクション」『文藝春秋』1955年1月。

橋本朔郎「松方コレクション由来記 第十二話」『かわさき』川崎重工業、1970年、第13号、p.52。

[15] 「萩原徹氏の松本重治氏あて文書(26.9.13)」『国立西洋美術館設置の状況 第三巻 — 年表・資料編 —』前掲、pp.90-5。

[16] 「萩原徹氏の松本重治氏あて文書(26.9.13)」前掲。

『作品目録』国立西洋美術館設置の状況 第三巻 — 年表・資料編 —』前掲、pp.345-59。

[17] Lettre de Cécile Goldscheider à Gilbert Adrey, le 26 décembre, 1950, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

[18] Lettre du Directeur des Domaines de la Seine à Cécile Goldscheider, le 5 janvier, 1951, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

[19] Liste des sculptures de la collection MATSUKATA conservées au Musée Rodin, le 15 janvier, 1951, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

このリストには作成者の記載がない。それ以前の経緯から、セーヌ県公有財産管理局がパリ・ロダン美術館で作成したものと考えられる。

[20] Lettre du ministre des affaires étrangères, le 8 août, 1951, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

[21] この公式・リストに掲載された作品が最終的に日本に返還となり、現在の国立西洋美術館の松方コレクションということになる。

『作品目録』国立西洋美術館設置の状況 第三巻 — 年表・資料編 —』前掲、pp.359-74。

[22] Police collective d'assurance contre l'incendie, le 24 février, 1937, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

[23] Police collective d'assurance contre l'incendie, le 6 mars, 1941, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

[24] ひとつは

Proces-verbal d'inventaire, Direction des domaines de la Seine, Séquestre Japonais, Matsukata Kojiro, le 10 août à 14 heures, 1945, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

もうひとつは8月24日付の手紙とともに残されている。

Lettre de Gilbert Adrey à Cécile Goldscheider, le 24 août, 1945, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

Proces-verbal d'inventaire, Direction des domaines de la Seine, Séquestre Japonais, Matsukata Kojiro, le 10 août à 14 heures, 1945, Dossier Matsukata, l'Archives du musée

Rodin, Paris.

1945年には、別に9月30日付で発行者の記載のない公式発表用リストが存在しているが、前記2つのリストを加えたこれら3種類のリストは、すべて当時の近代美術館学芸員ベルナル・ドリヴァルの立ち会いによって作成されており、のちに述べるように1945年8月10日の同一の調査にもとづくものと考えられる。

Liste communiquée le 30 septembre par Monsieur Dorival, 1945, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

[25] Procès-verbal d'inventaire, Direction des domaines de la Seine, Séquestre Japonais, Matsukata Kojiro, le 16 mars à 15 heures, 1948, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

(Procès-verbal d'inventaire, Direction des domaines de la Seine, Séquestre Japonais, Matsukata Kojiro,) le 16 mars à 15 heures 30, 1948, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

[26] 作品名については、1937年のリストと1953年の公式リストでは不一致があるが、1953年のリストには作品名の変更について註で説明されており、それをあてはめると照合することができる。

[27] 「作品目録」国立西洋美術館設置の状況 第三巻 — 年表・資料編 — 前掲、p.374。引用中、「L'Ombre」は《大きな影》を示し、以下「Le buste de Dalou」は《ダルウの胸像》、「Petit torse d'homme」は《小さなトルソ》をさす。「ブアルソヴィー」はワルシャワのこと。

なお、1937年のリストと1953年の公式リストで作品総数が一致しないようにみえるが、1937年のリストに手書きで添えられた《嘆き》と《小さなグループA（「三人のファウナたち」のこと）》を加えると総数は一致する。

[28] 《絶望（ブロンズ）》に関しては、1937年のリスト欄外に手書きで作品名が記載されており、その存在自体の確認はされていたようである。なお、この作品は現在国立西洋美術館で《嘆き》と呼ばれている作品である。《プルーターニユの3つの頭部》については、今後の調査課題として残っている。

[29] 現在国立西洋美術館で《ラッセル夫人の胸像》と呼ばれている作品は、1953年のリストまで《カミーユ・クロデル》と記載されていたことから、この場合の《クロデル》も《ラッセル夫人の胸像》を指していると考えられる。

[30] これは《永遠の青春》をさす。

[31] 8月24日付の手紙とともに残されているリスト。

Lettre de Gilbert Adrey à Cécile Goldscheider, le 24 août, 1945, *op. cit.*

Procès-verbal d'inventaire, Direction des domaines de la Seine, Séquestre Japonais, Matsukata Kojiro, le 10 août à 14 heures, 1945, *op. cit.*

[32] Lettre de Cécile Goldscheider à Gilbert Adrey, le 24 septembre, 1945, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

[33] Procès-verbal d'inventaire, Direction des domaines de la Seine, Séquestre Japonais, Matsukata Kojiro, le 10 août à 14 heures, 1945, *op. cit.*

[34] Memorandum, “Coll. Matsukata, Pièce qui manquent” sans date, Dossier Matsukata, l'Archive du musée Rodin, Paris.

このメモには日付がないが、《エヴァ》鑄造の可能性を示す1945年頃から、リストに《髪に花を飾る少女》《ジャン・ポール・ローランスの胸像》が戻る1948年までの間に書かれたものと考えられる。

また、このメモと1941年のリスト上の印では、ニューヨークに送られた作品について月が異なっているが、アメリカに送られた4点の作品名は一致している。

なお、バリ・ロダン美術館の資料室には1938年サンフランシスコ、1939年ニューヨークでロダンの展覧会が開催された記録はなく、私的な展示に利用された可能性もある。

[35] この展覧会に関する一連の手続きについての資料。

Lettres sur l'Exposition des œuvres de RODIN à la KUNSTHALLE de BALE, du 10 avril au 30 juin, 1948, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

[36] Direction des domaines de la Seine, l'an mil neuf cent quarante huit et le seize mars à 15 heures 30, Dossier Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.

[37] Procès-verbal d'inventaire, Direction des domaines de la Seine, l'an mil neuf cent quarante huit et le seize mars à 15 heures, Dossier Matsukata, l'Archive du musée Rodin, Paris.

[38] 《地獄の門》の構想スケッチによると、《エヴァ》は《アダム》と対て門の両側に置くよう、1881年から構想されているが、もとの門の発注には《エヴァ》も《アダム》も含まれていなかった。クローディ・ジュードラン「《地獄の門》のデッサン」『ロダン—地獄の門—展』国立西洋美術館、1989年、pp.19-32。

《エヴァ》の制作経緯については、ボジールが展覧会への出品年代とブロンズ鑄造年、大理石制作年を精査し発表しているのをそれを参考にした。ボジールはアブルツェツツイをモデルにして大型の《エヴァ》が制作されたのを、1883年ロンドン出品の1/2等身大像の制作の前と考え、長年アトリエに放置されていた等身大の《エヴァ》が1887年にブロンズ鑄造され、1899年の公開に至ったと考えている。そのほか、《エヴァ》についての概要を知るための主な文献をあげておく。

BEAUSIRE, Alain, *Quand Rodin exposait*, Musée Rodin, 1988, pp.82-5.

LEVKOFF, Mary L., *Rodin in His Time*, Los Angeles County Museum of Art, 1994, pp.61-3.

TANCOCK, John L., *The Sculptures of Auguste Rodin*, David R. Godine and Philadelphia Museum of Art, 1976, pp.148-57.

[39] アブルツェツツイはアンナとアデルの二人姉妹であり、どちらもロダンのモデルを務めている。どちらが《エヴァ》のモデルであるかは、わかっていない。しかし、レヴコフは、等身大の《エヴァ》が1890年代に制作されたことを示唆しながら、アンナが1895年に妊娠していたことをあげ、アンナがこのモデルを務めた可能性を示している。一方、バトラーはアデルを《エヴァ》のモデルとしている。

Exh.cat., *Rodin et ses modèles. Le portrait photographie*, Musée Rodin, Paris, 1990, pp.30-1. LEVKOFF, Mary L., *op. cit.*, p.63.

BUTLER, Ruth, *op. cit.*, p.188.

[40] DUJARDIN-BEAUMETZ, Henri-Charles-Etienne, *Entretiens avec Rodin*, Paul Dupont, Paris, 1913, pp.63-4.

今回の引用は下記文献所収の部分を筆者が翻訳した。

TANCOCK, John L., *op.cit.*, pp.149-50.

BEAUSIRE, Alain, *op.cit.*, p.83.

[41] TANCOCK, John L., *op.cit.*, p.157.

[42] BARBIER, Nicole, *Marbres de Rodin, Collection du musée*, Musée Rodin, Paris, 1987, p.198.

[43] 《エヴァ》の大理石像は、1883年ロダンのアシスタントのポツォーニが1/2等身大のものを彫ったのが最初とされている。その後、1/2等身大の大理石の《エヴァ》は数点彫られているが、等身大の《エヴァ》は1/2のものを拡大して作られたのではなく、それとは別に等身大ブロンズ像が制作された後にあらためて彫られたものと考えられている。

タンコックによると石で作られた等身大の《エヴァ》は以下の3点である。

「DENMARK

Copenhagen, Ny Carlsberg Glyptotek, Gift of Ny Carlsbergfondet, 1907, Purchased by Carl Jacobsen in 1907, Carved by Antoine Bourdelle.

FRANCE

Paris, Musée Rodin.

UNITED STATES

Dallas, Elizabeth Meadows Sculpture Garden, Southern Methodist University.]

TANCOCK, John L., *op.cit.*, p.157.

BEAUSIRE, Alain, *op.cit.*, pp.84-5.

BARBIER, Nicole, *op.cit.*, p.198.

[44] TANCOCK, John L., *op.cit.*, p.157.

[45] パリ・ロダン美術館に記録されている個々の作品データのなかに、松方幸次郎に売却した《エヴァ》の項目があり、それには松方が1920年2月17日にパリ・ロダン美術館に対して購入代金25000FFを支払っていること、1928年に鑄造されたことが記載されている。

Fiche *Eve, G.M - Version sans Rocher*, Date fonte 1928, Acquéreur: Matsukata Kojiro, l'Archives du musée Rodin, Paris.

[46] Fiche *Eve, G.M-Version au Rocher*, Date fonte 1945/05/12, l'Archives du musée Rodin, Paris.

[47] 1945年時点の《エヴァ》の鑄造について、なぜもとの石膏原型ではなく石を使用したのかについては、原型の特定とともに確かなことはわかっていない。しかし、1994年、静岡県立美術館で行われたシンポジウムで、「ロダン美術館ではロダン彫刻を新鑄造する際、どれを鑄造するかをどのように決めているのか」という質問に対する答えとして、現パリ・ロダン美術館館長のジャック・ヴィランが原型の選択について語った内容に次のようなものがある。

「テラコッタについては鑄造しませんし、昨日御紹介した《イヴ》のように、石膏像に石膏以外の材質が加わっているものも鑄造しません……」。

この発言は《エヴァ》の原型には石膏以外の物質が含まれていることから、それから新鑄造することはできないことを示している。これを1945年に《エヴァ》を鑄造する際に石像をもとにしたこととして断定することはできないが、一つの可能性として提示しておく。

静岡県立美術館編『シンポジウム「ロダン芸術におけるモダニティ」』静岡県立美術館、1996年、p.119。

[48] HERRIOT, Edouard, *Rodin*, Editions Jean Marguerat, 1949, no.81.

「EVE AU ROCHER, après 1900, bronze, h.1,75m」

[49] 『国立西洋美術館設置の状況 第三巻 ―年表・資料編―』前掲、pp.98-9, 101-2, 103-5, 107-8, 169-70, 258-60。

Dossier des Bourgeois de Calais de Matsukata, l'Archives du musée Rodin, Paris.



Rodin's Sculptures from the Matsukata Collection:

Sculptures transferred from the Musée Rodin between 1937 and 1948, and the cast of *Eve* in the National Museum of Western Art, Tokyo

[Abstract]

Mina OYA

In 1959, the National Museum of Western Art was established in Tokyo to house a portion of the Matsukata collection which had been returned to Japan from the French government more than forty years after Matsukata began to acquire works of art. Matsukata seems to have collected over ten thousand of pieces in Europe, and today some of these works are in the collections of the NMWA and the Tokyo National Museum, while others were either sold in Japan and in Paris, or burned during World War II in London. Matsukata did not leave any list of the art works in his possession, and hence, we cannot grasp the entire scope of his collection.

The NMWA has presently fifty-three pieces of Rodin sculpture collected by Matsukata. Catalogues for sales and exhibitions of the Matsukata Collection from 1928 to 1960 show that five more pieces were imported to Japan. The Rodin sculptures in the NMWA were first deposited in the Musée Rodin after Matsukata's purchase. The French government began to make a definitive list to return them to Japan in 1951, and offered this list to the Japanese government in 1953. This article presents several lists made between 1937 and 1948, lists which were compiled prior to the political procedure to return the Collection was begun. These lists indicate that some sculptures were transferred from the Musée Rodin during this period. These lists also refer to the casting of *Eve* which is now in the NMWA collection.

The earliest list of Rodin sculptures in the Matsukata Collection is attached to a fire insurance policy dated 1937. There are also other lists at the Musée Rodin related to Matsukata's Rodin sculptures which predate the 1951 list; they are the 1941 list, lists from 1945, and lists from 1948.

According to these lists, several sculptures were moved from the Musée Rodin to the United States in order to be exhibited, and they were also sent to a foundry in Malakoff. Some of these works were not returned to the Musée Rodin.

For example, the title of *Eve* is found on the 1937 and 1948 lists, but not on the 1941 list (marked with "X" on the 1941 list) and the 1945 list. Another document at the Musée Rodin says that *Eve* was "sent to the Foundry Rudier for sale in October, 1941" and "cast at the Foundry Rudier to be returned to the Matsukata Collection (May, 1945)." On the other hand, there are two different descriptions of *Eve* at the Musée Rodin. The first records that *Eve* was cast in 1928 for the Matsukata Collection, and the second notes that *Eve* was cast in May of 1945 for "Japan." The former is a version of "Eve without Rock," and the latter is a different version, "Eve on the Rock," which is the same version found at the NMWA. It can be supposed that "Eve without Rock" was cast in 1928 for Matsukata and kept in the Musée Rodin until the 1937 list was made. Meanwhile, there was one more *Eve* cast in 1945, but from a model of "Eve on the Rock," based on the marble or limestone version, and this replaced "Eve without Rock" cast in 1928. This was recorded on the 1948 list, the 1951 list, and the 1953 list, and is presently found in the collection of the NMWA.

Acknowledgements: For my research at the Musée Rodin, I hereby express my special gratitude for every consideration from Mme Claudie Judrin, Conservateur of the Musée Rodin, and her assistant, Mlle Christina Buley. M Alain Beausire, Documentary Specialist of the Musée Rodin, and Mme



Delclaux of the Musée's Archives helped me to acquire adequate descriptions from the documentary files. I would like to thank Mr.Akiya Takahashi, Mr. Chikashi Kitazaki, and Mr.Masayuki Tanaka, Curators of the National Museum of Western Art, Tokyo, for allowing me to access to all the documents on Matsukata and Rodin in the museum.

I should like to particularly express my appreciation to Mr. Jacques de Caso of the University of California, for indicating the right direction for my research, and to the late Professor Albert Elsen of Stanford University who encouraged me to research and write about Rodin's sculptures.